

第五章

プラネタリウムの担当者



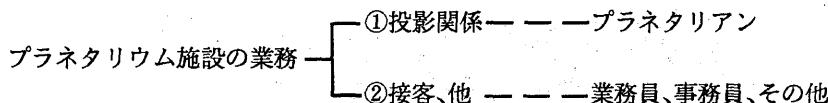
第五章 プラネタリウムの担当者

●はじめに

プラネタリウムに関連したさまざまな業務の中で、投影内容に直接関係する仕事に従事している人々をここではプラネタリアンと呼ぶことにします。

プラネタリウム施設はこのプラネタリアンを中心的に、施設全体の管理業務や見学者の応対に従事する人々、事務部門などから構成されています。すなわち、図5-1のように大きく2つに分けることができます。2の接客や建物管理に関する業種は同種の他施設でも必要とされる一般的な職種ですが、1のプラネタリアンはプラネタリウム施設を特徴づける独自の専門職といえます。

図5-1. プラネタリウム施設の大きな2つの業種



プラネタリウム運営に必要とされる職員は館の全体的な規模、装置の型や量、あるいは活動内容、見学者数、ある状況では社会的背景や個々の職員の質によって違ってもきます。ただし、それぞれの責任領域をオーバーラップさせることは可能です。

●職種と職員

プラネタリウム施設に必要な職種とその業務をまとめてみると図4-2のようになるでしょう。(1)～(4)がプラネタリアン、(5)～(8)が接客や建物に伴う職種です。

(1) 館長

科学全般に関する広い知識と、将来の動向に関する見識を持ち、施設全体の活動を方向付けていく能力がなければならないのは言うまでもないでしょう。それと同時に、次に述べる指導員の資質も合わせもつことが必要です。

(2) 指導員について

※他章では指導員をプラネタリウム担当者と表記している

教育活動の前面に出なければならない責任の重い職種です。利用者からは天文・宇宙関係の専門家・教育者と見なされていますので、それに対応できるだけの能力が要求されます。

社会教育・学校教育の専門職として社会教育主事・博物館学芸員・教員免許のいずれかを条件として求めるべきでしょう。最近では博物館学芸員資格を義務づける館が増えてきています。投影・普及事業・調査研究などのプラネタリウムの活動は、社会教育の多くの手法と技術そして理論を知らなければ企画・実施が難しいからです。

天文の単元として行なう学習投影では専任教員の配置も考えられます。

(3) 技師について

器械の不調で投影を中止するのは避けたいところですが、ハードウェアの宿命でいつかは壊れます。コンピュータ制御のプラネタリウム、あるいは補助投影機が多い場合などは技師を常駐させるべきでしょう。新しい投影機の導入・開発の際も、配線しなおしなどの作業が必要になり、技師の存在・能力が大きく影響してきます。

(4) アーティストについて

わが国では音響技師・画家を正規に配している館はないようです。プラネタリウムソフトの製作は多くの館では外注に頼っており、予算上の制約、受注会社の技量から指導員の意図を十分反映しきれない場合もあります。臨機応変に投影や普及活動を行なうためには、プラネタリウムを熟知したアーティストが必要です。館内にいない場合は、多くの局面で柔軟な対応ができず、予算も多くかかってしまいます。

図5-2. ①投影関係＝プラネタリアン

(1) 館長

天文学者あるいは天文学の教育を受けた研究者あるいは教育者で、かつ指導力のある者が望ましい。館あるいはプラネタリウム部門の責任者。館・部門を代表し外部との折衝にあたる。またプラネタリウムの中でも特に教育的側面に権限と責任を持ち、投影内容、テーマ、その他重要事項を決定し、かつ教育活動も行なう。

(2) 指導員(プラネタリウム担当者)

プラネタリウムの教育的業務にあたる。解説者、シナリオライター、投影実技担当者など。投影のための資料収集、調査研究、教材作成なども行なう。館によっては展示や他の教育業務にも従事する。天文学を修め、器械技術に精通していることが望ましい。

(3) 技師

プラネタリウムの維持管理に責任を持ち、必要なら操作も行なう。器械製作・光学・電気等の技術的訓練を経ていて、天文学の基礎知識を持っていることが望まれる。新装置の開発も行なう。

(4) アーティスト

音響技師、画家など。プラネタリウムの教育的業務に要する音・絵など視聴覚関係ソフトの制作に従事する。

図5-3. ②接客、事務、建物管理等

(5) 業務員

見学者への案内や誘導を行なう案内員、暖房・空調・電気設備などの管理や建物維持管理、安全衛生等を担当する管理作業員、館内外の清掃を担当する清掃作業員、売店の販売員、チケット販売担当員など。

(6) 事務員

一般事務、経理事務、司書業務、秘書業務、広報宣伝など。

(7) 補助員

投影実技、教育活動、業務、事務などで特定の時期に人手が必要な時や代理として補助員をおくことがある。もちろんそれぞれの仕事に相当通じている必要がある。

(8) その他

必要に応じて秘書、守衛、警備員、庭師、駐車場管理員、手荷物預かり所員などをおく。

(5) 業務員について

投影中は1~2人の監視員・誘導員をドーム内に待機させなければなりません。特に傾斜型ドームでは、フラットドーム型に比べ、投影中の出入りと見学者誘導に細かい配慮が必要になってきます(傾

斜型では暗闇での移動は極めて危険)。

(6) 事務員について

館長・講師は対外的な業務や管理的な業務も多いものです。そこで、直接彼等を補佐する補助員あるいは秘書がいると効率が上がります。ある程度代理も勤まるような職員を置くことを特にお勧めします。

以上のような業種を個別・専門別にするか、あるいは同一人がいくつか兼ねるか、外部に委託するか等々の判断は経営責任者や館長に委ねられています。館の規模、機器の型や量、あるいは活動内容、見学者数、個々の職員の質、そして館の財政状態等をもとに決められることになります。

章末資料に職員数の実例が出ているので、参考にしていただきたいと思います。

●必要とされる職員数

次は、職員数の算定基礎となる仕事の質と量について考えてみることにします。

(1) 職員数を決める要素 一 仕事の量と質

まずプラネタリウムは典型的な労働集約型産業であると言えます。職員が直接その場で見学者にサービスするという要素が強く、ホテルや鉄道業などのサービス業に似ています。このプラネタリウム館の特徴を押さえて初めて、職員数が算定できるわけです。

プラネタリウムの仕事の中で、特に職員数に直接関係するような要素は以下のようなものにまとめられるでしょう。

図5-4. 職員数を決める要素

- ①一日の投影回数・種類・開館時間
- ②1回の投影に要する人数
- ③ソフト製作法(関与の程度、自作・外注)
- ④施設や機器の維持管理や開発(技師の有無、自前・外注)
- ⑤見学者サービスの比重
- ⑥プラネタリウム以外の仕事(普及、研究、事務、広報他)の比重
- ⑦改札法や誘導・監視法
- ⑧出勤と休暇体制(週休2日制への移行)
- ⑨予算
- ⑩その他(全天周映画等の併設、他部門との会議、その他)

①一日の投影回数・種類・開館時間

開館時間が8時間以上に及ぶ場合には交代要員を配置するか、交代勤務ができるような人数を確保しなければなりません。

筆者の経験では、1日に4回程度の投影をコンスタントに続けるには最低4~5名程度のプラネットリアンが必要です。

②1回の投影に要する人数

一般には投影は一人で行ないますが、音楽の夕のような特別投影時の音響や全天周映画などの特殊な投影機の操作、学習投影などで同時に複数名を要する場合を考慮しなければなりません。

③ソフト製作法

プラネタリウムはその性格上、投影内容が出来上がった時点から、プラネタリアン自らが投影し続けなければなりません。常に投影内容の準備は投影をこなしながらの作業となります。

もしオート用ソフトを自作するには、そのためだけに1～2名のプラネタリアンを配すべきで、完全外注の場合でも少なくとも仕様書はプラネタリアンが書かなければなりません。仕様書作成には何がしかの調査と準備は必要で、そのための時間と経費は確保される必要があります。

最も安価ですむのは従来の生のマニュアル投影であると言えます。

④施設や機器の維持管理や開発

機器、椅子、ドーム、周辺装置等の維持管理・修繕・更新・開発はそれだけで大変な仕事量です。技師の有無に関係なく、しなければならない仕事です。

⑤見学者サービスの比重

プラネタリアンは投影以外にも質問や問い合わせで見学者との交流を余儀なくされます。大事な教育事業なのですが、仕事量としては算定しにくいものです。館によっては見学者への相談窓口に人を配している所もありますが、これからその重要性は増していくだろうと思われます。

⑥プラネタリウム以外の仕事

プラネタリアンに展示や資料収集、調査研究、講座等の普及教育などが要請されているかどうかで仕事量がまったく異なってきます。特に展示や普及教育のかなりを担当する場合にはむしろ別の職種としてとらえるべきだと思われます。宣伝用原稿作成、経費の算定、支出伝票作成、業者との交渉等の仕事量も正しく考慮されなければならないでしょう。

⑦改札法や誘導・監視法

チケットの扱い方、見学者の誘導・監視法、建物構造の違いも人数を左右するポイントになります。

⑧出勤と休暇体制について

ここ数年、職員の労働時間を短縮する一方で、学校週五日制などに対応する業務量は増大する、という矛盾に多くのプラネタリウム館は悩んでいます。また家族とのすれ違いが職員のストレスの一因であるため、必要があれば休日も休暇がとれる体制も必要です。プラネタリウム館の職員数の増加は避けられないと思われます。

⑨予算

業務内容に基づいて予算が決められるのが理想ですが、現実は逆のようです。予算規模が職員数を決める最も大きな要素かも知れません。

⑩その他

全天全周映画は、同じドーム内での事業でも目的も専門性も全く異なり、プラネタリアンの範疇ではないと思います。もし全天全周映画やビデオ映画を導入するのであれば、新たな要員を伴う事業として考えるべきです。オムニマックス（IMAX社の全天全周映画）では映写機操作とドーム内監視に同時に2名を必要とすることに要注意です。また、各部署との連絡調整に要する時間も正しく考慮しなければなりません。

以上をまとめると、おおざっぱには職員数は館の規模で決まる、と言えましょう。これまた粗っぽいのですが、館の規模はドーム径、投影回数、投影の種類、見学者数などでよそ表現されます。

わが国の現状は、1日の投影回数プラス・アルファがほぼプラネタリアンの数となっています(これもある程度の職員数が確保されている館の場合)。アメリカに比べて少なく、それで充分と見ていい館の職員はいないようですから、きつい仕事を小人数でこなしているのが実態と言えるでしょう。投影は簡単に休止するわけにいかないので、そのしわ寄せは見学者サービス、普及教育事業、調査研究などにいっていると思って間違いないでしょう。プラネタリウムは労働集約型産業であり、職員の数と質がサービスを決定する最大要因であることを、改めて強調しておきます。

(2) 適切な人数 一 一つの基準

プラネタリウムを目的通りに円滑に運営していくために必要とされる職員数の目安を考えてみましょう。ただし「円滑な運営」に対する見方が設置者・管理者と社会教育関係者で大きく違っており、社会教育関係者の考える「適切な人数」が確保されている館を見出すのはむずかしいようです。

以下、2つのモデルケースを想定してみましょう。社会教育関係者が理想とする人数にはほど遠いとは思いますが、わが国の現状から見て達成可能な数字であると信じます。

図5-5. モデルケース1. 比較的小規模の場合

①一日の投影回数・種類	— 開館時間8時間、2回投影
②1回の投影に要する人数	— 1名、時々2名
③ソフト製作法	— 外注、年5作
④施設や機器の維持管理	— 外注、簡単なものは自前で
⑤見学者サービスの比重	— 電話での問い合わせぐらいに応える
⑥プラネタリウム以外の仕事	— 大きなものはない
⑦改札法や誘導・監視法	— 改札・簡単な場内清掃を行なう
⑧出勤と休暇体制	— 休日出勤は半数
⑨その他	— 特になし



「適切な人数」

専任プラネタリアン	2
事務員	1
臨時職員	2

小規模館

◆プラネタリウムと併設される天文台

ここ数年、職員の労働時間が短縮される一方で、学校週5日制などに対応して業務量が増大する、という矛盾に多くのプラネタリウム館は悩んでいます。また、本格的な観望用天文台を併設し、そちらもプラネタリウムの職員が兼務とする科学館も増えてきました。

夜間という、けして安全とはいえない時間帯に、一般市民を公共施設に招く観望会というサービスは、天文学の普及に素晴らしい効果をあげる反面、職員のたいへんな負担となっています。朝から夕方まで接客の仕事を行うプラネタリウム職員を、そのまま夜間引き続き、交替なしで大変な心身の緊張をともなう天体観望会の業務に従事させるというとんでもない発想は、職員の過労をまねく他に、危険な事故にも直結してきます。天文台を併設する場合、時間ローテーションがまったく違うので、職員も別に採用しなければ安全な運営は不可能でしょう。

図5-6. モデルケース2. 比較的大規模の場合

- | | |
|---------------|--|
| ①一日の投影回数・種類 | - 原則8時間、4回投影、時に5~6回
学習投影も含め多彩なプログラム |
| ②1回の投影に要する人数 | - 1名、時々2名 |
| ③ソフト製作法 | - 半外注、年6作 |
| ④施設や機器の維持管理 | - 原則は自前。機器多数 |
| ⑤見学者サービスの比重 | - 電話、来訪を受け付ける |
| ⑥プラネタリウム以外の仕事 | - 展示場300m ² 、講座、講演会、観望会他 |
| ⑦改札法や誘導・監視法 | - 業務員が行なう |
| ⑧出勤と休暇体制 | - 休日出勤は半数 |
| ⑨その他 | - 全天全周映画有り、3回映写 |

▼
「適切な人数」

指導員	4
展示担当講師	1
技師	1
事務員	1
臨時職員(プラネタリウム関係)	2
業務員	3
全天全周映画映写技師(監視含む)	2
映画用臨時職員	2

大規模館

昨今の社会状況を考慮して臨時職員(アルバイト、パート等)の活用を重視しました。便利屋的に考えるのではなく、当該施設を利用して学んでもらい、その成果を広く社会に還元してもらう、という積極的立場で臨時職員を人材として育てることはもっと考えられてよいのではないかでしょうか。

以上2例は筆者の経験に基づいて図5-4に示した職員数を決める要素を総合的に評価した結果であって、個々の要素を精査したわけではありません。単純に要素ごとに人数を当てはめることができればよいのですが、明確な合理的な算定基準がない以上それは不可能であると思います。ただ大雑把な目安としては以下のようになるでしょう。1日の投影回数をNとすると

$$\text{適切な人数} = N + \alpha + \beta + \text{事務員} + \text{業務員}$$

ここで α は1以上の数で、主として3)のソフト制作、5)6)の見学者サービスやプラネタリウム以外の仕事、8)勤務体制、10)その他に関するファクターで、内容によって大きく変動します。 β は施設や機器のメンテに関するファクターで0か1です。また事務員や業務員は施設規模やどこまで仕事の範疇とするかによって大きく変動します。以上はまったくの雑な目安に過ぎないことを再度強調しておきたいと思います。

(3) 人材の確保

プラネタリウムは一般から見ると極めて特殊な仕事であると言えます。しかしプラネタリアンには特に資格や免許は定められていませんし、社会的な評価もあいまいなままであります。俸給上も魅力的な職業とは思えませんが、プラネタリアンを希望する人が

増えてきています。数少ない天文・宇宙の普及教育・研究の場であることが知られるようになったからでしょうか。

プラネタリアンの採用法に特別なことは何もありません。ただ、専門性を重視するなら公募すべきでしょう。専門と言ってもわが国には制度的にプラネタリアンの養成を行なっているところはないので、

- ①大学で天文学あるいは関連分野を学んだ
- ②現にプラネタリアンあるいは補助員として従事している
- ③他の職業に従事しながら、天文学やプラネタリウムを学んでいる
- ④意欲あふれる未経験者

のような人達が候補となりましょう。博物館や図書館などの社会教育施設従事者、学芸員、司書とのバランスを考えて同程度の能力と訓練度は必要とされましょう。最近は大学院終了者の希望も少なくありません。若干のコメントを加えると、

②に関連して：引き抜き

即戦力が必要とされる場合です。しかし現役の引き抜きはわが国では容易ではありません。よその臨時職員を活用する手もあります。新規オープンなどでとりあえず経験者を必要とする時は特に有効です。開館時から特徴を持った完成度の高い運営を目指すなら、建設検討段階から専門職として経験者を迎える必要がありましょう。

③に関連して：トラバーユ

別の職種を経験していることはプラネタリアンとしても非常に有利になるでしょう。転職まで考えるほど意欲ある人達の活用を考えたいところです。

④に関して

即戦力にはなりません。専門家に育てていくためには長期にわたるトレーニングが必要で、その決意が経営者に求められます。

専門性を重視しなければ

- ⑤所属内での配転・異動
- ⑥兼務
- ⑦誰でも

といった方法もあります。

配転・異動・兼務等では本人の意志に無関係にまわされるのが普通です。仕事内容が本人の志向と合致する場合はまだしも、合わない場合は本人はもちろん見学者にも悲劇です。たとえフィットした場合でも仕事を覚えた頃に再び配転となってしまう事になります。

プラネタリウムは特殊なだけに、そこで経験が直接次の仕事につながることが少ないと考慮しなければならないでしょう。

また、専門性を重視しない館の多くは小規模館と思われますが、そうした館のプラネタリアンはあらゆる分野を担当しなければなりません。専門性を重視する大型館よりもその仕事は大変かも知れません。

ここで公募の例をいくつかあげておきます。

[例1] 1970年頃から公募。これは1992年4月採用要綱

1. 応募資格 : 大卒か見込みの者で、35才まで。天文、物理、化学等を専攻した者
2. 学芸員資格: 有無は応募の条件としないが、未取得の場合は学芸員補。取得後に
学芸員となる

《結果》応募11名。採用は男子1名。理学修士、物理専攻、25才

[例2] 1992年4月採用要綱

1. 応募資格 : 市職員に準じる。学歴等特に条件なし。35才まで。天文に精通しており、普及活動に意欲のある者

《結果》応募17名。採用は男子3名。教育学部卒・23才。教育学部卒後、臨時教員経験、25才。文学部卒後、民間企業経験者。

[例3] 1992年4月採用要綱

1. 応募資格: 意欲のある人1名、25才前後まで
 2. その他 : 大卒で理科教員免許か学芸員資格を有していることが望ましい
- 《結果》応募3名。採用は、28才男子。教育学部卒後、プラネタリウム経験あり

資料5-1. プラネタリウム館の担当職員数実例

[例1] 独立館の例

財団法人を経営母体とするプラネタリウムだけの独立館。マニュアル投影中心。ドーム径20m、客席は同心円、1日6~7回投影。月ごとに話題を変更。常設展示有り、天文教室、講座、特別展、観望会、友の会など総合的な教育普及活動にも力を入れている。

職種	人数	内容・その他
1) 館長	1	非常勤。主に対外的折衝
2) 指導員	5	解説員。学芸課解説係
3) 技師	1	学芸課技術係。解説も行なう
4) アーティスト	0	絵は外注。音響は講師が担当
5) 業務員	8	券売・売店・案内。清掃・建物管理は外注
6) 事務員	3	一般事務、経理事務など
7) 補助員	2	夏の繁忙期
8) その他	0	警備は外注

教育のためのプラネタリウム

[例2]他の施設と同居している例

他の施設とプラネタリウムを経営している例。オート投影中心。ドーム径17m、客席265の一方方向、1日7~10回投影。最終回は生解説。話題変更は年4回。公募写真展、講演会、観望会なども行なっている。案内、券売、事務などは経営母体の別の部門が一括して要員の手当を行なっており、プラネタリウム部門の仕事は投影関係に集中している。

職種	人数	内容・その他
1)館長	1	常勤。主に投影、対外的折衝を担当
2)指導員	5	オート用ソフトの制作、プラネ操作、解説
3)技師	2	新投影器の開発、プラネ操作、ソフトの組み込み
4)アーティスト	0	外注
5)業務員	~5	兼任。経営母体が一括して担当
6)事務員	~5	兼任。経営母体が一括して担当
7)補助員	5	週末他夏の繁忙期に配置。他課が一括して担当
8)その他	0	他施設と一緒に経営母体が一括して担当

[例3]科学館の一部門として位置づけられている例

市立科学館の一係として位置づけられている例。運営は財団。マニュアルとオートの混合型。ドーム径26m、座席は傾斜式一方方向、1日4回投影。話題変更は年5回。全天全周映画オムニマックスの映写(1日3回)、天文関係展示、友の会の運営、講演会、観望会、調査研究なども行なっており、プラネタリウムの比重はあまり大きくない。

職種	人数	内容・その他
1)係長	1	主任学芸員。企画・投影・映写・展示、他課係との調整
2)講師	5	学芸員。企画・投影・全天全周映画映写・展示・普及ほか
3)技師	0	主に外注。機器メンテの一部は学芸員・別係が担当
4)アーティスト	0	外注
5)業務員	4	総務課員が輪番で担当。検札・案内に常時4名配置
6)事務員	1	常勤アルバイト。主に友の会事務、司書業務担当
7)補助員	1	日曜日、繁忙期。投影・全天全周映画映写
8)その他	0	

資料5-2. プラネタリウム担当職員配置の現状

主としてプラネタリアンの配置の現状を調査した結果である。

出典:河原郁夫、1989年、プラネタリウム研究、第6集、p.26、

全国プラネタリウム連絡協議会発行

第五章 プラネタリウムの担当者

施設名	全職員数	プラネタリウム		投影回数			座席数
		専任	その他	平日	土曜	日曜	
钏路市青少年科学館	12	4	4	1	2	4	91
札幌市青少年科学館	32	5	1	5	5	7	250
盛岡子ども科学館	14	2	1	4	4	5	270
仙台市天文台	11	9	1	7	5	5	208
いわき市文化センター	15	4		1	1	2	245
つくばエキスポセンター	25	3		4	4	6	330
栃木県子ども総合科学館	55	2	4	4	4	4	300
高崎市少年科学館	12	6		4	5	5	315
狹山市立中央児童館	6		2	4	4	4	105
習志野市教育センター	13	3			3	3	252
千葉市郷土博物館	11	2		6	5	3	100
文京区教育センター	19	1	3	4	1		136
世田谷区立教育センター		3	4		2	3	180
天文博物館五島プラネタリウム	20	7		6	6	7	453
中野区立中野文化センター	18	3		4	4	3	180
杉並区立科学教育センター	23	1	3	4	2		162
サンシャインプラネタリウム	110	7		8	9	9	265
荒川区立教育センター	15	2		1			50
まちだ東急百貨店スターホール	400	3	1	4	5	5	150
神奈川県立青少年センター	85	5		4	4	6	135
横浜こども科学館	33	4	1	5	5	7	300
川崎市青少年科学館	11	6		3	3	5	238
平塚市博物館	16	2		2	2	2	86
新潟県立自然科学館	41	2		2	2	5	210
富山市科学文化センター	26	3	2	4	4	4	250
石川県立中央児童会館	17	2	1	4	4	4	220
山梨県立青少年科学センター	13	1		3	2	3	120
岐阜市科学館	12	4		3	3	5	221
飛騨プラネタリウム	4	2	1	3	5	5	90
名古屋市科学館	61	5		5	5	5	450
一宮地域文化広場	11	2	1	2	2	5	275
東栄町御園天文学科学センター	3	1					65
豊田産業文化センター	11	1	2	3	3	3	212
京都市青少年科学センター	54	8	2	5	4	5	231
大阪市電気科学館	29	4		5	4	5	302
吹田市立千里市民センター	9	1	3		2	3	100
神戸市青少年科学館	35	5	2	5	5	6	300
明石市立天文科学館	16	5	1	5	5	6	400
生駒山宇宙科学館	8	3		7			230
広島市こども文化科学館	20	3		4	5	5	345
宇部市勤労青少年会館	20	1				1	70
北九州市立児童文化科学館	15	4	1	3	3	3	450
熊本市立熊本博物館	17	1	2	4	5	5	218
人吉球磨カルチャーパレス	15	1	1	1	1	3	101
鹿児島県立博物館	21	3		4	4	4	125

●科学館開設時における人材の確保

自治体などで科学館開設準備室ができると、担当者の方は、よく各県の類似施設を見学されます。そのとき、展示物や建物・設備などはよく観察されるのですが、つい、運営に携わる「人の資質」の観察を忘れるのがちです。

科学館運営を将来にわたり、大きく左右するのは、財政支援と人材です。

準備室担当者は、人材はあとでゆっくり、とかく物と器を先にかたづけようとします。しかし、実は人は物と器に大きくかかわってくるため、真っ先にそろえておいた方が何かと便利で後々まで役に立ちますし、結局よい物と器が選べるのです。

物と器の選択の際、担当者は利点欠点などがよくわからず、結局、見学した他の施設と同じような物を揃えるしかなくなります。その結果、既存の同じような科学館が全国に建設されることとなります。

別に市民は全国の科学館行脚をするわけではありませんから、他と同じでもいいかもしれません。問題なのは、数ある欠点までもが、そのままおとなりのコピーとなることです。市民に愛される科学館・プラネタリウムになるためには、徐々に進歩していかなければならないのに、何も変わらなかったり、逆に悪くなることも....

特色のある、優れた施設づくりのために、準備室担当者は、最低1名以上は、修羅場をかいくぐってきた経験者の確保を考える必要があります。

しかし、なかなか経験者の確保は難しく、次善の策として先進他館の経験者を「相談役」として、正式に依頼することを考えるかもしれません。これも先方機関の了解がいりますが、公的な書面によって依頼すれば可能性は高いでしょう。

また、何館もの企画を行政と共同で担当してきた展示業者の意見をきくのも一つの方法です。概ね日本の社会教育関連業者は研究熱心で、資料も豊富にそろえています。

さらに開館時の人材確保のため、卒業見込みの大学生を考えるかもしれません。既成の概念に固まっている、新鮮な職員の「卵」に期待するのもよいでしょう。

現場の主要セクションごとに、物理、生物、天文...など各分野を修めた人材を県内・外の大学に求めることができます。

できれば、博物館学の単位を取得した学生がよいでしょう。プラネタリウムや科学館が何をするところか、既にそういった学生は理解しており、施設をいくつも視察し、調査・研究を行なっているはずです。教育学を学んだか、教員免許をもっている学生も、特に学習投影では威力を発揮することでしょう。

また、社会教育施設の場合、普及活動や研究ばかりでなく、広報活動、ポスターや掲示物作成、会合設営、電気の配線、コンピュータの管理など多彩な仕事をこなさなければならないのが普通です。専門プラスアルファの能力も、実務に大いに役立つことでしょう。

大学に足を運び、関係する研究室の掲示板などで学生を確保できるかもしれません。大学事務当局と相談すればとくに問題はないでしょう。

もし、準備室にアルバイトを雇う予算があれば、この段階で、有望な学生をアルバイトとして計画に参加してもらうことは有効でしょう。アルバイト段階で、そのひとの柄や資質についておおくを知ることができるからです。

経験者、フレッシュな職員の卵、行政サイドの担当者、そして業者の連携プレーで、活力ある科学館の誕生が期待できるのではないでしょうか。